

～「紳士・淑女」の皆様へ～

元富山県環境科学センター所長 岩田 助和 Sukekazu Iwata (工業化学科第一期卒業生)



母校は、開校してから早60年、第一期卒業生が「後期高齢者」になろうとしている。この機会に設立当初の記憶を「歴史」として刻んでおこうと思った。同級生は古い記憶を呼び起こし、後輩たちは「温故知新」、未来に向かって活躍して欲しい。物忘れ一步手前の昔話であり、記憶誤り等があればご容赦を。

国立富山高専の設立

1963年(昭和38年)3月、北陸3県で初めて富山県に国立高専が設立されることが決定した。我が国の産業の急激な発展に対応するため、従来の6、3、3、4に加えて6、3、5という新制度の学校の誘致に富山県が成功したものである。これは、富山・高岡地区の新産業都市の決定とも相まって、マスコミで大きく報道され、県内の中学校の関心は一気に高まった。私の通う中学校でも先生方が「腕試し受験」を大いに勧めたことを記憶している。そして、翌1964年(昭和39年)2月、入学試験が芝園中学校と富山中部高校の両校で実施された。私は芝園中学校で受けたが、会場に着きびっくりした。何と、バスに乗って受験にくる学校もあったのだ。なにしろ、競争率は全国一の20倍であり、会場はごった返していた。受かろうという気は全くなく、気楽なものであった。同年4月18日、開校式及び入学式が新校舎でとり行われた。初代校長は野路末吉氏で、開校宣言に続く挨拶の中で、君たちは、今日から生徒ではなく、大学生同様「学生」であり、「紳士・淑女」である、この学校の校風と伝統の基礎は諸君一人ひとりにある、という言葉は15歳の胸に深く刻まれた。

高専生活

家は入善の田舎なので寮から通学したが、渡された同級生名簿を見てびっくりした。当時は「統計会テスト」というものがあり、県内順位が公表されていたが、上位ランク者がかなり入学している。石川県、福井県勢も同様らしい。えらいことになったと思った。当時、寮の消灯時間は22時～23時頃だったと記憶しているが、みんなそれぞれではない。電気スタンドに毛布をかぶせ、寮言葉で「盗電」を行い、必死に勉強した。巡回する寮監の先生も見えて見ぬふりだった。また、15の春に親元を離れ、ホームシックになる者もあり、なんとか、励ましあいながら生活した。とはいえ、それも1年、

後輩たちが入寮してくると、いつのまにか、先輩風を吹かせていた。そのころの構内はぬかるみが多く、通学はいつも長靴であり、ひと目見て「寮生」と分かったものである。4年、5年になると上級生の寮になり、いまだから言うが、よく寮監の先生を交えて麻雀したものだ。実におおらかな時代であった。最も、麻雀は卒業後の世渡りに大いに役立ち、当時の必須科目であった。寮といえば、1967年(昭和42年)から1968年(昭和43年)に総代を務め、寮祭では、学校側を説得し、当時、若者が熱狂したエレキバンドステージを決行した。時間に余裕があり、寮には音楽に凝る人も多かった。また、初めての寮生バス旅行も行った。青春時代の濃き思い出である。学校の催しは当然ながら公開し、近くの会社の女性や女子高の生徒も招待した。これがきっかけで青春の1ページを飾った人もいたのではないかな。

次は、クラブ活動である。私は、中学からやっていたバレー部を立ち上げ、顧問の関場鐵也先生は私を初代キャプテンに任命した。練習しようにも体育館はない。寮の近くに屋外コートを作るため、皆でローラーを引いてコートを作った。グラウンドもそうである。「高専」という性格上、なかなか大会や練習相手に恵まれず、高校、大学に丁寧な依頼状を書き、練習試合を行った。引退間際には、思い出づくりとして、社会人等が参加する富山県代表大会に出場した。なんと決勝戦に進み、これに勝てば東京だ、と意気込んだが敗退した。翌日の新聞を見て大変悔しかったことを思い出す。その頃、寮の周辺はうさぎが飛び回る田園地帯であったが、しばらくすると一軒のラーメン店が開店し、よくラーメン一杯で長居したものである。また、「高専第一期」ということで何事にも地域の協力が得やすく、なんとなく可愛がられていたような気がする。

卒業が近くなれば、いよいよ卒研である。私は当時、我が国の最大課題であった「公害」に関心を持ち、都市公害を選んだ。こつこつと市内を流れる河川の水質調査を行い、富山県にもデータを提供した。河川下流は、黒く濁み斃死魚類が非常に多く、大いに問題意識、危機意識を持ったものである。その頃の我が国は、高度経済成長のひずみみで、連日「公害事案」が報道され、本県も、カドミウム、水銀等の汚染が表面化し、全国の縮図のようであった。

社会人

就職は県内外から数多くの求人がきたが、家庭の事情もあり、県内の伸び盛りの大企業を選んだ。入社後すぐ、上司から、「君は卒研で公害をやっていたのだから、当部門で初めての排水処理施設の建設をみてくれ」と言われた。ビーカーを扱っただけなのに戸惑ったがやるしかない。業者に叱られながらようやく完成させると、こんどは、「3人の部下をつけるから、施設管理のチーフになれ」との命令だ。20歳を過ぎたばかりの若造に部下をつけるとはすごい会社だった。この時代は、公害国会や県議会が開かれ、諸法令に基づく届出書の作成に一人で携わった。おかげで、給料よりも残業手当が多かった月もあった。半面、若手であろうと裁量権も十分与えられ、自由闊達な雰囲気だった。

入社2年目になる直前、富山県が公害防止に携わる職員を募集していると聞き、どうせなら卒研から一貫通貫、全うしてやろうと思い、試験会場の県民会館に向かった。大学生、大学院生、社会人が大勢いて驚いたが、実務を経験したせいか、運よく新採職員として再スタートすることができた。入庁当初は、高専第一期の県職員ということで大変珍しがられた。その頃の本県は「公害デパート県」の汚名を着せられ、知事直属の「公害課」が設置された。私は、水質汚濁・大気汚染、産業廃棄物など公害行政すべてを経験し、県内の多くの工場・事業場に立ち入った。神岡鉱山にも行き、坑道にも入った。今から思えば職員すべてが富山県の環境を守るのに必死だった。当然、帰宅は遅く、泊まったことも度々あった。正に、「24時間戦えますか」だ。現在ではとても考えられないことだが必死の日々だった。また、日本海の環境保全のため、ロシア、韓国にも渡った。特に、ロシアは極東一帯、サハリンまで出向いた。これも今はとてもじゃないが無理だろう。

環境保全課長時代は、ダイオキシン、アスベスト問題や「水の王国とやま」を掲げる中沖知事のもと、名水保全に取り組み、議会委員会答弁や記者会見をこなした。危機管理の部署でもあったため、最も大切にしたのは、スピード感と現場感覚であり、県民、議員、マスコミには実感がこもる説明に努めた。その後、環境科学センター所長を最後に県を退職し、高圧ガス団体の専務理事として赴任した。すぐ、これまでの行政感覚から民間感覚に切り替えた。一番の思い出は東日本大震災である。あの頃は、オール電化真っ盛りの時代で、停電が長引き、移動可能なLPガスが重宝がられた。しかし、ガス圧力を調整する機器が被災のため供給できず、LPガスが使用できない。このため、事業者の

協力を得て、無償提供された機器を福島県に送り大変感謝された。エネルギーの多様化・分散化はエネルギー危機管理の基本である。この団体はリーマンショックから立ち直り、組織基盤が安定したことを見届け、後進にお任せした。

あとがき

私は、三つの組織を経験したが、「環境・危機管理」は一貫して天職であったと思っている。県退職後は、区長や土地改良区役員などを務め、悠々ではないが自適生活を送っている。小さい地区なので、今も複数の役員を兼任しており、これまで婦人会を除き、ほとんど経験したのではない。多様化、複雑化が急速に進む現代は、リーダーは若い人でなければならない。私も最後は、少し早めにバトンタッチをしてきたつもりだ。後を託された者は礼節の気持ちを持って上手に世代交代を進め、新しい感覚で取り組めばよい。今の世は、コロナ禍、エネルギー、脱炭素など問題は山積みしているが、逆に地球規模で仕事の幅は広がっている。我々の時は、よく、高専卒は真面目だが、「ゆとり・遊び」が今一步、という声を聞いた。産業界の求める即戦力の裏返しかと、深読みした時もあったが、評価するのはあくまで外側の声だ。今はどんな評価だろうか？現代は、より高度で広い知識、技術が求められている。後輩諸君は、むしろ一貫教育を基盤にしてどんどん上を目指して欲しい。基礎研究に進むのもよし、専門技術者になるのもよし、広く浅く、行政に進むのもよし。自分の人生だ、幅広く自由に羽ばたけばよい。ただし、政治家になる人は、まず、身を律することに徹し、特に「紳士・淑女」であるべきだ。近頃、つくづくそう思う。

最後になるが、そろそろ、富山高専卒のノーベル賞受賞者が出て欲しいと願っている。



(鹿島槍)



(舟川べり)